

「元気福井っ子笑顔プラン」の見直し （論点、現状と課題）

（頁）

論点 1	少子化時代の学校経営、学級運営の在り方はどうあるべきか。 また、今後どのような改善策や支援策が必要か。	1
論点 2	福井県独自の教育体制である「元気福井っ子笑顔プラン」の 見直しの方向性はどうあるべきか。	7
[各論 1]	今後の小学校低学年（1～2年）の児童に対す る学校生活への支援はどうあるべきか。	9
[各論 2]	今後の小学校中学年（3～4年）の教育体制の 充実はどうあるべきか。	11
[各論 3]	今後の小学校高学年（5～6年）の教育体制の 充実はどうあるべきか。	12
[各論 4]	今後の中学校の教育体制の充実はどうあるべき か。	13

論点 1

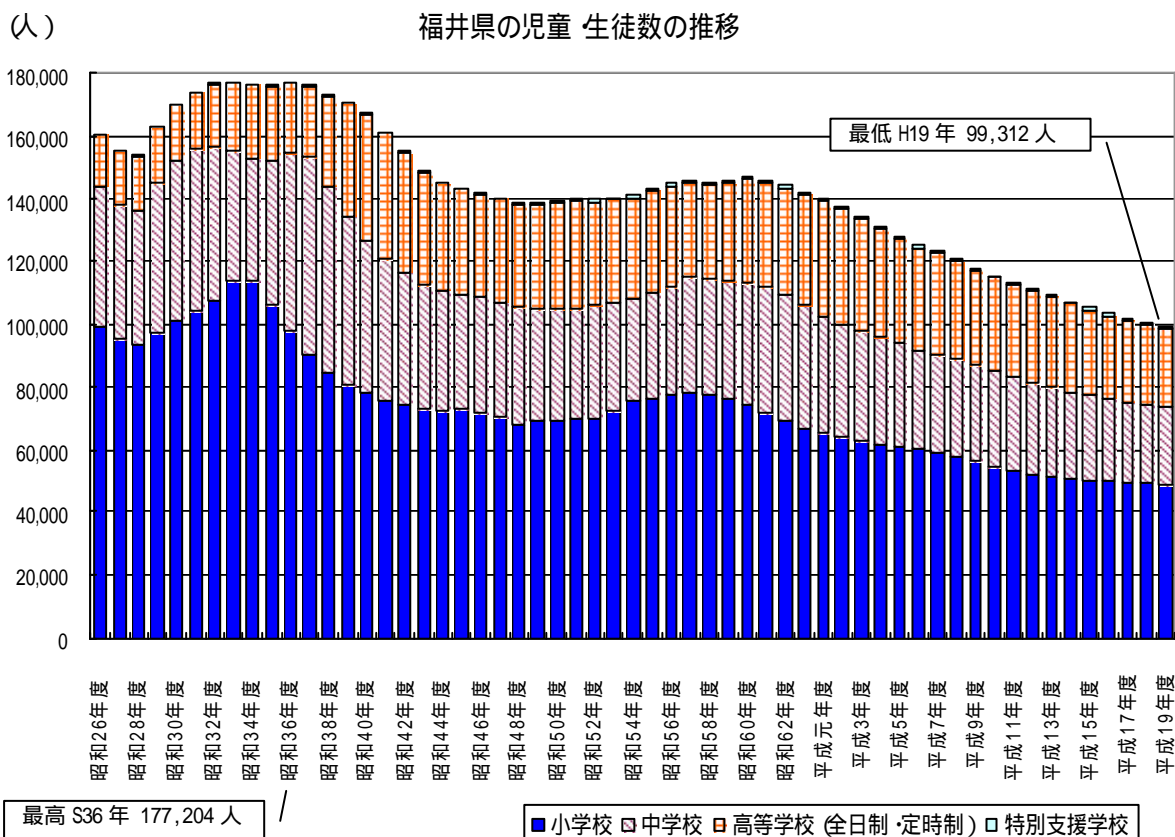
少子化時代の学校経営、学級運営の在り方はどうあるべきか。また、今後どのような改善策や支援策が必要か。

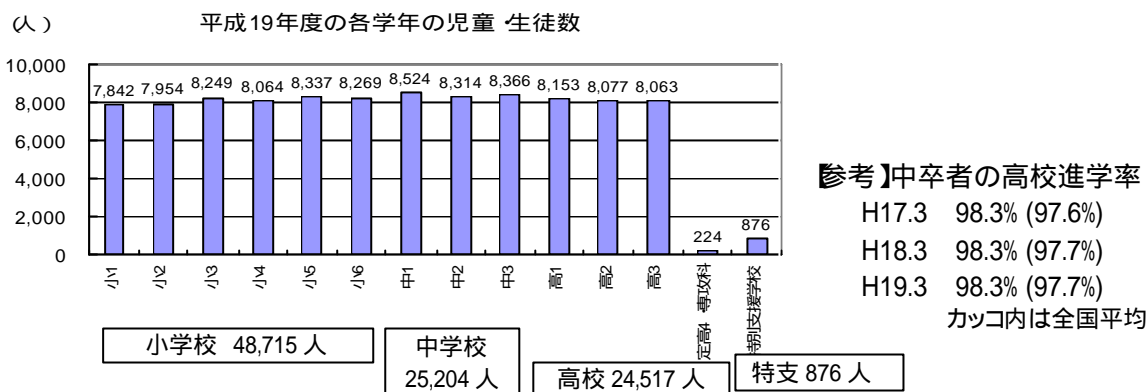
- ・子どもたちの可能性を最大限に伸ばすことができる学校教育を実現するための、学校経営や学級運営の在り方、具体的な改善方策
- ・学校の統廃合問題への対応や支援の方向性

【現状と課題】

出生率の低下が進み、本格的な少子化時代が到来。福井県の合計特殊出生率は、全国唯一、2年連続で上昇（H16:1.45 H17:1.47 H18:1.50）しているものの、今後、中長期的にみれば出生率の低下が続くことが予測

こうした中、福井県の児童・生徒数は毎年減少。平成19年度には、小、中、高校、特別支援学校（いずれも国公立の合計）に在籍する児童・生徒数の総数が、戦後初めて10万人を割り込んだ（ピーク時〔昭和36年度〕の56%）





学校数は、中学校においてはほぼ横ばいで推移しているが、小学校においてはこの10年間で約8%減少（H9:233校 H19:215校）

< 学校数の推移 >

区分		H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
小学校	国立	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	公立	232	230	228	227	224	224	224	220	218	213	213
	私立	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	計	233	232	230	229	226	226	226	222	220	215	215
中学校	国立	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	公立	82	82	82	82	82	82	82	82	81	82	82
	私立	2	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4
	計	85	86	86	86	87	87	87	87	86	87	87
小中計		318	318	316	315	313	313	313	309	306	302	302

学校数は分校を含む。表中の()内は休校の学校で内数

平成19年度の県内の児童・生徒数別の学校数をみると、小学校においては、児童数199人以下の学校が53.9%を占めている。また、中学校においては47.1%を占めている。また、10年間の推移をみると、小学校においては300人以上の規模の大きい学校が減少、中学校においては生徒数が少ない学校が増加

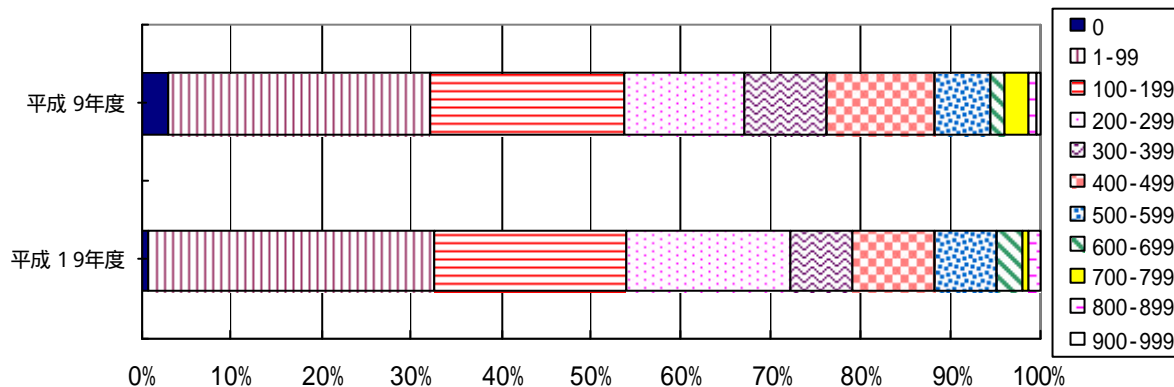
< 児童・生徒数別の学校数（平成19年度） >

【小学校】													(校)
児童数 (人)	0	1-99	100-199	200-299	300-399	400-499	500-599	600-699	700-799	800-899	900-999	計	
学校数 (割合)	2 0.9%	68 31.6%	46 21.4%	39 18.1%	15 7.0%	20 9.3%	15 7.0%	6 2.8%	1 0.5%	3 1.4%		215 100%	
国立						1						1	
公立	2	67	46	39	15	19	15	6	1	3		213	
私立		1										1	

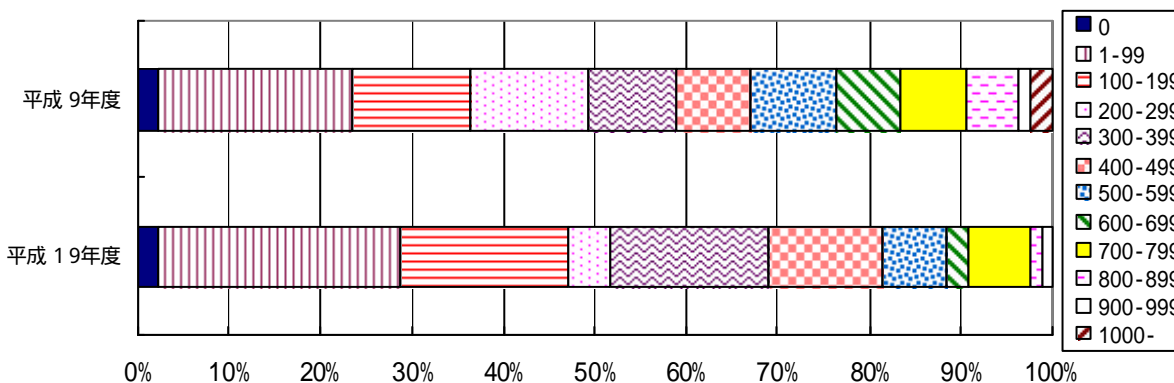
【中学校】													(校)
生徒数 (人)	0	1-99	100-199	200-299	300-399	400-499	500-599	600-699	700-799	800-899	900-999	計	
学校数 (割合)	2 2.3%	23 26.4%	16 18.4%	4 4.6%	15 17.2%	11 12.6%	6 6.9%	2 2.3%	6 6.9%	1 1.1%	1 1.1%	87 100%	
国立					1							1	
公立	2	21	14	4	14	11	6	2	6	1	1	82	
私立		2	2									4	

出典：学校基本調査報告書（福井県）

児童・生徒数別の学校数（10年前との比較・小学校）



児童・生徒数別の学校数（10年前との比較・中学校）



学級数は、平成9年度から15年度までに、小学校においては約5%、中学校においては約9%減少

福井県では、平成16年度から「元気福井っ子笑顔プラン」（制度概要はP7を参照）に基づき、段階的に学級編制基準を引き下げてきたことから、児童・生徒数が減少する中においても、中学校では学級数が増加

< 学級数の推移 >

「笑顔プラン」

区分	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
小学校	国立	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
	公立	2,103	2,071	2,029	2,014	1,998	1,983	1,995	1,996	1,999	1,987
	私立	0	4	5	6	6	6	6	6	6	6
	計	2,115	2,087	2,046	2,032	2,016	2,001	2,013	2,014	2,017	2,005
中学校	国立	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
	公立	922	909	892	872	860	850	828	836	840	878
	私立	10	10	13	15	14	13	16	16	18	18
	計	941	928	914	896	883	872	853	861	867	905
小中計	3,056	3,015	2,960	2,928	2,899	2,873	2,866	2,875	2,884	2,910	

一方で、小学校においては学級数の約4%が複式学級となっている。複式学級は、この10年間で約16%増加（H9: 76学級 H19: 88学級）

< 編制方式別の学級数（平成19年度） >

【小学校】		(学級)									
区分	単式学級							複式学級	特別支援学級	計	
	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	小計				
学級数	299	296	284	281	289	322	1,771	88	137	1,996	
国立	2	2	2	2	2	2	12			12	
公立	297	293	281	278	286	319	1,754	88	137	1,979	
私立			1	1	1	1	5			5	
【中学校】		(学級)									
区分	単式学級			複式学級	特別支援学級	計					
	1学年	2学年	3学年								
学級数	325	278	279	882	61	943					
国立	3	3	3	9		9					
公立	316	269	270	855	61	916					
私立	6	6	6	18		18					

出典：学校基本調査報告書（福井県）

収容人員別の学級数をみると、小学校においては1学級20人以下の学級が全体の27.9%、7人以下の学級が10.6%を占めている。また、中学校においては、1学級20人以下の学校が14.2%、7人以下の学級が9.3%を占めており、近年、規模の小さい学級が増加

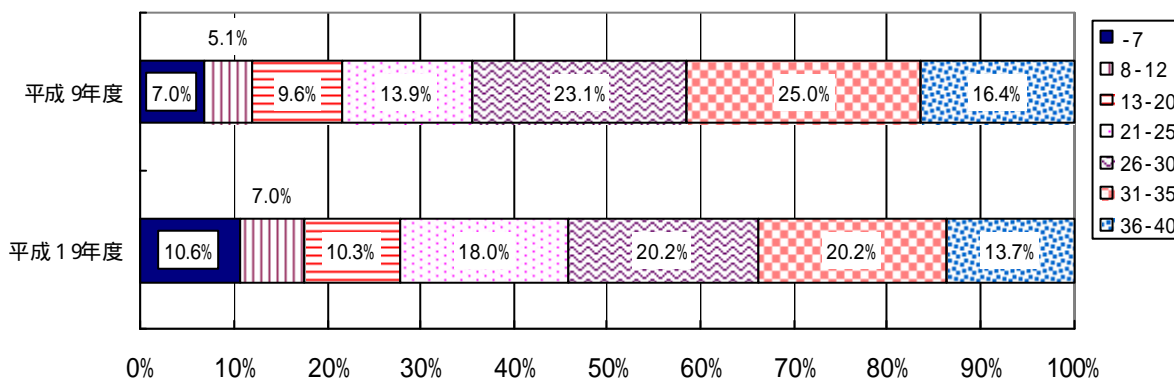
< 収容人員別の学級数（平成19年度） >

【小学校】									(学級)
区分	7人以下	8～12人	13～20人	21～25人	26～30人	31～35人	36～40人	計	
学級数	211	139	206	359	404	404	273	1,996	
国立						4	8	12	
公立	206	139	206	359	404	400	265	1,979	
私立	5							5	

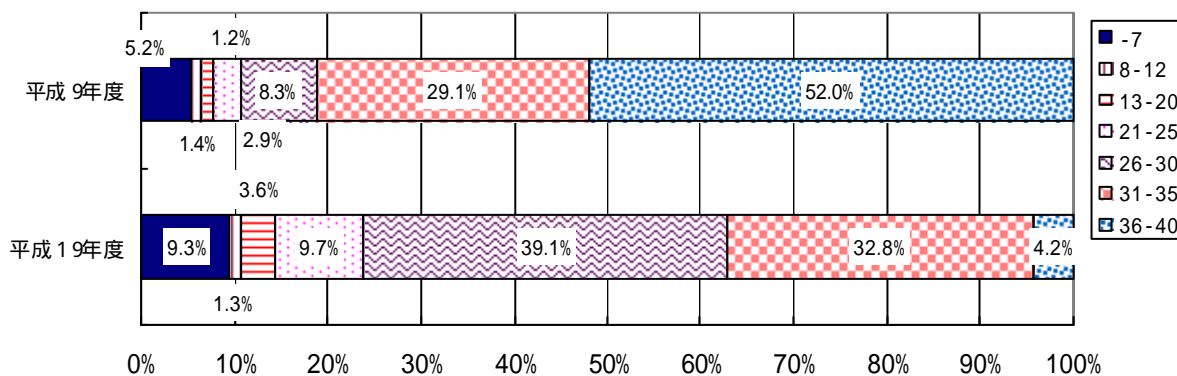
【中学校】									(学級)
区分	7人以下	8～12人	13～20人	21～25人	26～30人	31～35人	36～40人	計	
学級数	88	12	34	91	369	309	40	943	
国立							9	9	
公立	86	12	26	85	367	309	31	916	
私立	2		8	6	2			18	

出典：学校基本調査報告書（福井県）

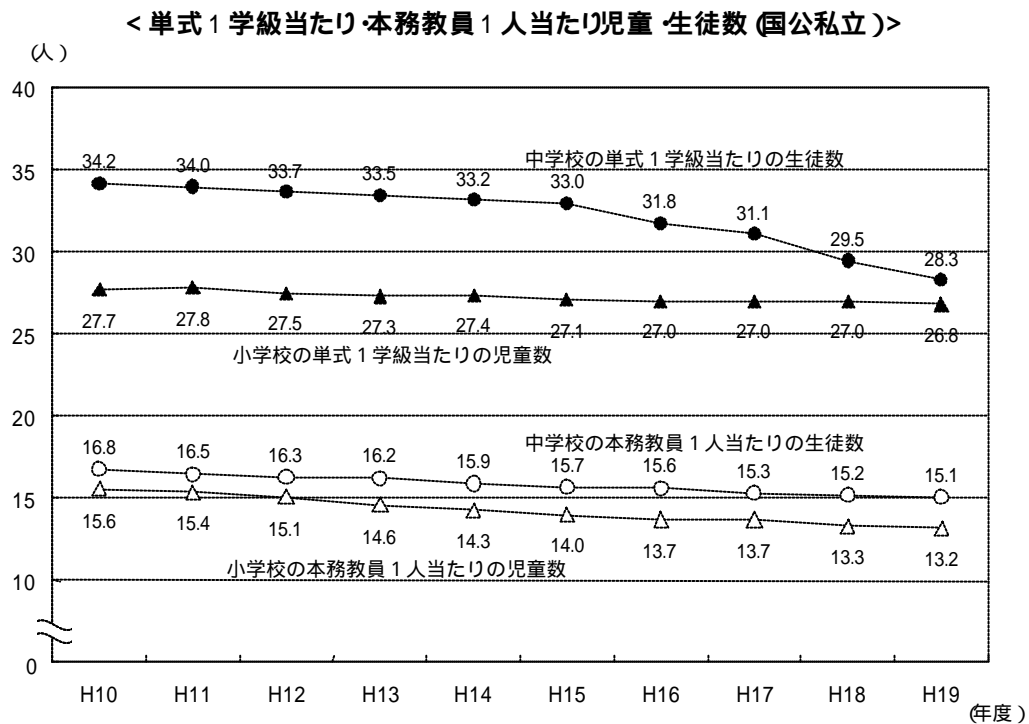
収容人員別の学級数（10年前との比較・小学校）



収容人員別の学級数（10年前との比較・中学校）



また、単式学級1人当たりの児童・生徒数、本務教員1人当たりの児童・生徒数は減少。これらは、児童・生徒数の自然減のほか、特に、中学校においては「元気福井っ子笑顔プラン」により、学級編制基準を引き下げた影響が大きい



論点2	福井県独自の教育体制である「元気福井っ子笑顔プラン」の見直しの方向性はどうあるべきか。
-----	---

【現状と課題】

福井県の子どもたちの持てる可能性を最大限に伸ばしていくには、一人ひとりの個性や能力、理解度に応じたきめ細かな教育が不可欠

そこで、未来を担う笑顔いっぱいの元気な福井っ子を育成するため、小・中学校における各学年の特性を踏まえて学級編制基準の適正化等を図り、きめ細かな教育体制の充実を目指す「元気福井っ子笑顔プラン」を平成16年度から4か年計画で実施

（「元気福井っ子笑顔プラン」の概要）

	学年	内 容	プランの考え方	H19 実施数	
				学校	学級
小学校	1、2年	・学級編制基準は40人のまま、36人以上の学級に非常勤講師を配置 [県費非常勤講師] H17...100人 H18...100人 H19...100人	社会生活上のルールの指導	48	110
		・21人以上の学級に児童の学校生活を支援するためのボランティアを導入 [ボランティア登録者数] H18...登録5,674人 H19...登録4,613人（10月末現在）	同上	134	467
	3年～5年	・学級編制基準は40人のまま、T.T、課題別や習熟度別等の少人数指導を強化	生活指導から学習指導へ	104	367
	6年	・平成19年度までに学級編制基準36人を実現（ ） [学級編制基準] H16...39人、H17...38人 H18...37人、H19...36人	学力向上のための教科指導の充実	22	22増
中学校	1年	・平成19年度までに学級編制基準30人を実現（ ） [学級編制基準] H16...37人、H17...35人 H18...32人、H19...30人	学力向上と不登校等の未然防止	52	68増
	2、3年	・平成19年度までに学級編制基準36人を実現（ ） [学級編制基準] H16...39人、H17...38人 H18...37人、H19...36人	進路指導に応じた教科指導の充実	36	51増

小6～中3では、T.T、少人数指導も実施

現プランの成果と課題を検証し、独自の教育体制をさらに推進していくための具体策を検討することが必要

現プランの成果と課題を検証するために、児童・生徒や保護者、学校に対しアンケート調査を実施し、現状と効果、課題、要望等について整理

（アンケート調査の概要）

調査期間：平成19年9月5日～9月21日

調査対象：平成18年度、平成19年度に「元気福井っ子笑顔プラン」により、
低学年学校生活サポート非常勤講師が配置された学校

（対象者）児童、保護者、担当教員

低学年学校生活サポートボランティアが導入された学校

（対象者）児童、保護者、担当教員

T・T、少人数指導のための教員が加配された学校

（対象者）児童・生徒、保護者、担当教員

小学校6年生から中学校3年生で少人数学級編制のための教員が加配された学校

（対象者）児童・生徒、保護者、担当教員

なお、児童・生徒と保護者については、調査校で任意に抽出した1学級が対象

回答数：以下のとおり

	学 校 数	児 童 ・ 生 徒	保 護 者
	25校	956人	634人
	50校	1,341人	534人
	38校	1,237人	978人
	50校	1,275人	1,178人

調査結果：次ページ以降の各論にポイントを記載

（詳細は、[参考資料1](#)を参照）

論点2 [各論1]

今後の小学校低学年（1～2年）の児童に対する学校生活への支援はどうあるべきか。

現状と効果

[非常勤講師の配置]

- ・小学校1、2年生の36人以上の学級を対象
- ・担任とのチーム・ティーチングを実施

【効果】

- ・学校、保護者、児童の三者ともに、「基本的な生活習慣の育成」「学習習慣の定着」について「効果がある」と回答

（具体例）

- ・児童がルールを守ったり、あいさつができるようになり、円滑な学級活動の実施
- ・おしゃべりをして授業に集中できない、宿題をしてこない、姿勢や鉛筆の持ち方の悪い児童への個別指導の実施

[ボランティアの導入]

- ・小学校1、2年生の21人以上の学級を対象
- ・活動内容 授業、朝学習（本の読み聞かせ等）、学校行事、給食、清掃等への支援

対象学級数... 4 6 7 学級
登録人数 ... 4, 6 1 3 人 活動延べ人数... 3 2, 7 1 3 人
(平成19年10月末現在)

【効果】

- ・学校、保護者、児童の三者ともに、「安全な学校生活の推進」「児童の心の安定」「学習環境の整備」について「効果がある」と回答

（具体例）

- ・校外学習、学校行事等において、交通安全や不審者対応といった安全の確保
- ・読み聞かせは、本に親しむきっかけづくりや穏やかな気持ちで朝の会を開始できるなどの効果

課 題

[非常勤講師の配置]

- ・ 36人未満の学級にも、支援が必要な児童が多数在籍
- ・ 低学年における基本的な生活態度の育成は、その児童の成長だけでなく、周りの児童の影響によるものが大

[ボランティアの導入]

- ・ 時間や仕事の都合上、参加者の確保が困難

要 望

[非常勤講師の配置]

- ・ 非常勤講師の配置基準（36人）の引き下げ
（少人数学級編制に対する要望もあるが、「T.Tによる指導が効果的」という意見が多数）

[ボランティアの導入]

- ・ ボランティア導入に対する県の支援
- ・ ボランティア確保に向けた情報発信

論点2 [各論2]

今後の小学校中学年(3～4年)の教育体制の充実はどうあるべきか。

現状と効果

- ・現在、小学校3年生～5年生に対して、重点的にT.T（ティーム・ティーチング）、少人数指導の加配を実施

【効果】

- ・「基礎的・基本的な学習内容の定着」「個に応じた学習の充実」「学習意欲や興味関心の向上」について、多くの学校が「効果がある」と回答
- ・「授業がよく分かるようになった」「やる気ができるようになった」「授業に集中できるようになった」と多くの児童が回答
- ・保護者も「授業がよく分かるようになった」と効果を容認

（具体例）

- ・理解が遅い児童に解決の手がかりとなるヒントを与えたり、自信を持たせるための具体的な言葉かけをしたりする時間を十分に確保
- ・算数の授業においてコンパスによる作図やグラフのかき方、分度器による角度の測り方など、個別指導が必要な児童への対応が充実

課題

- ・教科が限定されているが、もっと多くの教科でT.Tや少人数指導が必要
- ・T.Tや少人数指導を行うための加配教員の定数不足

要望

- ・T.Tや少人数指導を行うための加配の増加
- ・T.Tや少人数指導を実施する教科の弾力的な運用

論点2 [各論3]

今後の小学校高学年(5～6年)の教育体制の充実はどうあるべきか。

現状と効果

- ・6年生は36人学級編制(5年生は40人学級編制のまま)

【効果】

- ・「基本的な生活習慣の育成」については、全ての学校で「効果がある」と回答
- ・「学習習慣の定着」「特別に配慮が必要な児童への支援」「児童と教員との関係づくり」「不登校の未然防止」にも高い割合で効果を容認
- ・「授業に集中しよく分かるようになった」「友達との人間関係がよくなった」「落ち着いた学級になった」と65%以上の児童、保護者が回答(具体例)
- ・少人数となり、一人ひとりに目が行き届きやすくなっただけでなく、児童と関わる時間も増え、学習面、生活面で丁寧な指導を実施
- ・理科の観察・実験では、1グループの人数が少なくなり、児童の観察・実験に関わる時間を十分に確保

課題

- ・5年生、6年生と2年連続でクラス替えをすることがある。最高学年としての基礎固めや学年行事等に支障が生じ、学級経営面、生徒指導面で非効果的

要望

- ・5年生の学級編制基準を、6年生と同じ36人

論点2 [各論4]

今後の中学校の教育体制の充実はどうあるべきか。

現状と効果

- ・中学校1年生は30人学級編制、2、3年生は36人学級編制

【効果】

- ・「学習習慣の定着」「生徒と教師との人間関係づくり」「学力の向上」「特別に配慮が必要な生徒への支援」については、ほとんどの学校で「効果がある」と回答
- ・1年生では「不登校の未然防止」、2・3年生では「進路指導に応じた教科指導」について80%以上の学校が「効果がある」と回答
- ・「友達との人間関係がよくなった」「先生の話をよく聞け、授業に集中できるようになった」「授業が理解できるようになった」と多くの生徒が回答
- ・「友達との人間関係がよくなった」「落ち着いた学級になった」「意欲的に学校へ行くようになった」と多くの保護者が回答

（具体例）

- ・少人数であるため個別指導がしやすく、授業中の支援、ノートのチェックなど学習状況の把握が容易
- ・生活ノートに目を通す時間や教育相談の時間が確保でき、生徒と教員の人間関係づくりの面で効果

課題

- ・1年生では30人以下の学級できめ細かく指導できたが、2年生では学級数が減ることにより、生徒指導面等での問題が発生

要望

- ・2、3年生の学級編制基準を、1年生と同じ30人